

---

# 伝文

日本口承文芸学会 会報

【伝文】 第37号 2005年9月

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学文学部 荻原眞子研究室

Tel/Fax : 043-290-2310

---

## 先学からの伝言 - 国際化を視野に -

荻原眞子

10年前(1995年9月)のこの欄で野村純一先生は「外に向けての機能」と題され、インドのネール大学での学位論文審査を踏まえ、研究者集団である本学会が「海外の学会や大学と提携、連立する」必要を説かれた。その1年半後(1997年3月)には、臼田甚五郎先生が「学会への提言」として、国際会議の開催、口承文芸研究資料センターの創設、「口承文芸大事典」の編纂の三つを挙げられ、昭和52年5月24日に本学会が設立されたそもそのきっかけがヘルシンキでの第6回国際口承文芸学会とそれに触発されて韓国の関東大学で開催された東北アジア民俗学国際シンポジウムであったことを明らかにされておられる。

野村、臼田両先生の提言に共通する課題は、本学会の活動を拡張して世界に開くこと、平たくいえば、学会の国際化ということになる。それは具体的にはどういうことであろうか。海外で研究調査を行い、盛んに交流・情報交換をしておられる学会員も少なくない。しかし、学会の国際化は畢竟日本口承文芸学会の活動を土俵にしてなされなければならないであろう。さて、どうしたものであろうか。

本学会創設へ焦燥を募らせた臼田甚五郎、関敬吾、大林太良、直江広治先生たちは当時のような関心に基づいて研究をなされていたのか、そこに立ち戻ってみないことには臼田先生の「提言」の真意は測りがたい。この点で、例えば、大林太良「神話の系譜」、石田英一郎「女人島の話」、関敬吾「昔話の分布—とくに昔話・笑話・動物譚」[いずれも覆刻日本民俗学大系第12巻 昭和51(初版昭和34)]は示唆的である。一言すれば、ここに共通しているのは「文化史的視点」からの口承文芸研究である。特に、関論文は世界地図と日本地図を並べ、「二人兄弟」「うたう骨」など10例について分布を明らかにした、実に壮大な比較研究である。しかし、世界地図にはまだ空白が多い。今日の研究成果を総合するなら、その空白を埋め日本地図を補強することもできよう。内外の研究者の総力によって、日本にある昔話(他のジャンルの説話もちろん)がグローバルに鳥瞰できるようになるなら、それこそは日本の口承文芸を国際的な研究の俎上に上せることになるのではなかろうか。

国際会議へは周到な基盤づくりが必要である。それにはまず、学会活動の国際化の方法を考えなければならない。学会創設20周年の頃に吐露された先学の提言を、30周年を目前にした今、学会は真摯に受け止める時期にきているのではないであろうか。

シンポジウム「海外の口承文芸—フィールドの現在と研究」

酒井正子

2005年3月5日、千葉大学にてシンポジウム「海外の口承文芸—フィールドの現在と研究」がおこなわれた。「口承」の衰退と変質が叫ばれる中、グローバルな視野で現状を捉え直そうという、まことに時宜を得た企画である。冒頭コーディネーターの荻原真子氏は「先住民文化における言語の危機と口承文芸」と題し、全般的な母語話者の減少と言語学者との協働の必要性を指摘した。

熊野谷葉子氏「ロシアから：チャストゥーシカの20世紀と現在」は、19世紀末以来、体制や時代の変化を越えて民衆の本音をうたい継ぐ、ロシアの短詞型歌謡（あそび歌）の流行や歌の場、様式の変遷等に関する報告。現地収録の歌詞（巧みな訳）やAV資料をまじえ、口承・書承にネットサイトも介在し一つの大きな歌謡ジャンルが形成される動態を示した。剣持弘子氏「イタリアから：蓄積された資料と新しい資料と」は、ローカルな口承文芸の語りの場と研究の現状を紹介、渡辺洋子氏「アイルランドの口承文芸—フィールドワークの現在と研究—」は、1926年以来無文字・マイノリティ言語という状況下で営々と続けられてきた、民間伝承の収集・保存活動が報告された。

コメンテーターの坂井弘紀氏はカザフスタンの叙事詩の伝統を紹介しつつ、1) 文学として2) 歴史の素材として3) パフォーマンスとして、現代に再生あるいはリメイクされている現状を整理した。旧ソ連体制下でフォークロアの伝統は大規模に改変されたと聞くが、独立後は民族アイデンティティ形成の要として、ダイナミックな展開があるようだ。

「生きられる」伝統から「作られ再構築される」伝統へという流れの中で、音楽パフォーマンスとしての側面が強調されていく。地方語が廃れテキストの生成よりは音楽的洗練やアレンジ等に関心が向かう傾向は、各地で見られる。祭祀や生活の中に生きている度合いも様々で、マクロな言語状況をふまえて国際比較の視点が示されたことは、当例会の大きな収穫といえよう。

(東京都)

間宮史子

コーディネーター荻原真子氏、報告者は熊野谷葉子（ロシア）、剣持弘子（イタリア）、渡辺洋子（アイルランド）の3氏、コメンテーター坂井弘紀氏（カザフスタン）で進められた。ここでは、歌謡以外を扱ったものについて報告し、考えたことを述べたい。

まず荻原氏が、口承文芸の状況は言語の状況とイコールであるとして「先住民文化における言語の危機と口承文芸」について報告した。剣持氏は「蓄積された資料と新しい資料と」と題し、カルヴィーノ（『イタリア民話集』1956）以後の状況と新たなフィールド、インデックスの仕事、ペローやグリムの影響がみられる新しい資料の問題について報告した。さらに、日本人である氏がイタリアを研究対象とする意義として、比較研究の可能性と限界についても言及した。渡辺氏の報告は「アイルランド民間伝承委員会の活動と機関誌を通して」というもの。1926年設立のアイルランド民間伝承協会と、その仕事を実践するアイルランド民間伝承委員会（1935年設立）の蒐集活動について報告した。

数時間のシンポジウムで活発な討論を行うのはなかなか困難であるが、参加者個々のなかに何かひっかかり残るものがあれば、その意味はあったというべきではないかと思う。このシンポジウム全体を通して浮かびあがってきたことは、口承文芸研究者には何ができるのか、ということである。

「口承文芸」を蒐集し整理し残していくことに研究者が寄与してきたことは確かである。特に、いわゆる危機的状況にある言語においては、その果たす役割はなお大きいだろう。しかし、世界のどの地域においても「口承文芸」のかたちとあり方が変わっていく現在の状況にあっては、蒐集し残すだけではもはや意味をなさないだろう。つまりこれは「口承文芸研究」の課題でもある。ちなみに、2005年7月最終週にエストニアのタルトゥで開催された国際口承文芸学会（ISFNR）第14回大会のテーマは「口承文芸の理論と現代における実践」であった。（神奈川県）

## 第29回大会報告

会場 同志社大学

2005年6月4日(土)、5(日)

◎6月4日(土)

公開講演

城野裕子

邊恩田氏は「韓国のパンソリ語りの様式と語り手」で、まず、パンソリとは太鼓で節を打つ「鼓手」と物語を歌い語る「唱者」の二人による語り物であると定義した。その語りは演劇的要素が大きく、唱者は発声と調・長短の組み合わせを自在に駆使し、身振りや舞踏的動作も入れて演じ唱う。鼓手は伴奏だけでなく、合の手を入れたり、唱者の相手方を務めたりして「語りの場」の成立に極めて重要な役割を果たす。この後、パンソリ実演のビデオで唱者と鼓手の密接な関係が示された。また、語り手から見たパンソリの歴史や、語りの様式と伝承について解説し、最後にパンソリの「物揃え・物尽くし」の表現方法を紹介した。同種の物揃え文を比較すると、語り手による個人レベルの改変・創作だけでなく、流派による伝承の違いや語り本と読み本の伝本の関わりや系統が見えてくるという。

小松和彦氏は「フィールドから発想する怪異・妖怪研究—口承表象から絵画表象へ—」で、「怪異・妖怪伝承データベース」をネット上で公開後、「絵」は無いのかという質問が多数寄せられた事例を示し、現代人、特に若者は絵を媒介にして物考える傾向が強いことを指摘した。絵巻物に描かれた式神の姿などの例を挙げ、怪異という共通した曖昧なものを絵画化することでイメージが固定化されたり、論文の出版時に付けた参考図版が画一したイメージを読者に与えてしまう危険性を示唆した。そして、「七夕の祭文」に登場する天稚彦の父の姿を、いざなぎ流祭文の太夫達ほどのような姿なのか想像さえしたことが無いのに対して、「天稚彦草紙絵巻」では天上に棲む鬼、「天人女房」の絵本では中国の皇帝の姿に描いているとし、口承伝承と造形・絵画表象は同じではないので、その違いを考えていく必要があるという。「最近の語り聴かせは絵本を使うことが多いため、この問題を真剣に考えるべきだ。」と問題提起して締めくくった。(東京都)

特別演奏

N. ヘネシー氏のパフォーマンス

難波美和子

「伝承のバラッドと口承文学の世界」で演じられたニック・ヘネシー氏のパフォーマンスは、イギリスのバラッドと語りを聞くという楽しい経験と共に、天候の急変という効果もあって、印象深いものとなった。スコットの『最後の吟遊詩人の歌』にありそうな場面で、昔々のバードたちが冬のイギリスの領主の広間や宿屋の食堂で演ずるときにもしばしば外の嵐から聴衆の関心を奪い取らねばならなかったのではないかと思う。

語り手たちの会の櫻井美紀氏のご紹介では、バラッド・シンガーとストーリーテラーは活動内容によって区別されるようだが、ヘネシー氏はバラッド・シンガーであると同時にストーリーテラーであるように、両者の活動は重複しているのだろう。バラッドの物語は伴奏よりも言葉のリズムやリフレインによって音楽的に聞こえ、バラッドの伴奏に使われる比較的単調なメロディーは、昔話の語りのリズムに近いものが感じられる。あるいはバラッドと語りとの近さが感じられるのはヘネシー氏のパフォーマンスの性格なのだろうか。バラッドもお話も、言葉のリズムがとても心地よかった。また懇親会場で氏が英語で語った「頭山」は、そのままイギリスのお話になっているのではないか(柿をリンゴに変えれば)。聴衆へのサービスというのはいろいろな形で現れるもので、伝播の中には思いもかけない事情があったかもしれない。

口承文芸学会でもこのようなパフォーマンスの上演は珍しい。それは学会会場ではなかなか演者と聴衆との間の駆け引きや、場をつくるということが起こりにくいということ、フィールド・ワークを重視する立場から避ける意識が働いてきたのではないかと思う。しかし自身のフィールド以外のパフォーマンスに触れる機会は今後一層貴重になるだろうと考えると、今後もこのような企画が何らかの形で学会に導入されることは必要なことではないだろうか。(熊本県)

◎6月5日(日)

## 研究発表

### 〈第1会場〉

永池健二

ご詠歌の楽譜と口承伝承が変容するしくみ—  
密厳流を対象に

新堀敏乃

近代におけるご詠歌の伝承の変容の過程を、真言宗智山派に伝わる密厳流のご詠歌「追弔和讃」を例にとって、具体的に追求したもの。1931年に創始された密源流のご詠歌は、師範から議員へと、書記された楽譜と口頭による模範演唱や口伝などの両面から伝承されてきたが、その伝承は、一方で「正しい」演唱法を継承するという、強い模範性を有しながら、この数十年の間に、楽譜の表記においても、実際の演唱法においても、少なからぬ変化を重ねてきたという。

発表者は、その変容の過程を、楽譜の表記と、口伝の双方から具体的に追及し、そこに規範の下で豊かな音楽性を追及するため許されている「個性」としての演唱の幅が様々なバリエーションを生み出し、やがて新たな規範として、指定され、楽譜と口頭伝承の変化をもたらす仕組みを見出している。

今回の発表では音楽的な側面からのアプローチが主であったが、こうした楽譜や演唱法の変容には、時代の変化による歌詞の解釈、理解に対する変化も大きな動因の一つであろうと思われる。今後は、譜や音楽の面だけでなく、歌の表現の面も視野に入れた総合的な研究の展開を期待したい。

文化の生成と伝承—日本における「ロシア民謡」のケーススタディ

森谷理沙

トロイカなどのロシア歌曲は、今日も「ロシア民謡」として広く親しまれているが、それらの中には、ロシアの民謡以外にも、ロシア・ロマンスや、ジプシー・ロマンス、ソヴィエト時代の大衆歌謡までもが含まれている。本発表は、こうした我が国における「ロシア民謡」の流布を「異文化受容における新たなジャンルの生成」としてとらえ、その生成の過程を1950年代に盛んであった「歌声運動」と関わらせながら具体的に追及したものである。

具体的には、1950年代の歌声運動の中心的な担い手であった合唱団「白樺」の活動に着目し、

当時、刊行された楽譜などの文献調査や、現存の当事者たちに対する聞き書きを元に、ロシアの歌曲が、日本人の「ロシア民謡」として生成、定着していく過程を具体的に跡づけようと試みている。しかし、その試みは歌声運動を担った指導者たちの視点に限定されており、戦後の民主化運動の勃興の中で、その歌声運動を担い、享受してきた「大衆」の側面からの視点が欠落しているように思われる。今後は、戦後の社会状況も視野に入れた大きな観点からのアプローチが望まれる。(奈良県)

石井正己

後半はアイヌの口承文芸研究が2つ並んだ。奥田統己氏の「サハリンのアイヌ英雄叙事詩—金田一京助資料から—」は、金田一が公表したサハリン(樺太)の英雄叙事詩ハウキは『北蝦夷古謡遺篇』の1編しか知られていなかったが、本発表でノートに残された記録があることが紹介された。資料が北海道西南部に偏り、それによる立論だったが、今後それらは大きく相対化されねばならない時代を迎えた。サハリンの英雄叙事詩が基層にあるならば、北海道西南部の英雄叙事詩は、むしろ特殊な発達を遂げたように思われた。さらには、知里真志保の英雄叙事詩観も改めて検討されねばならない段階に来ているように感じられた。

萩中美枝氏の「アイヌの下紐」は、アイヌの口承文芸と女性史のはざまにあって、長く関心を持ちつづけてきたテーマであった。今、下紐というモノにまつわる伝承や意識がかつてのようなタブーから解放されつつある状況にあることを問題にした。金田一京助・知里真志保のアイヌ研究を次の世代につないできた間に、アイヌの人々の意識も研究者の関心も大きく変容してきたことになる。研究者の方がアイヌの人々よりもタブーに対する意識が強い、というのは、伝承と研究の関係が反転しはじめていることを示す。実は、こうした問題は、もう口承文芸のフィールドのあちこちで始まっているはずである。(東京都)

## 《第2会場》

山田 巖子

第二会場の最初の発表は阿部真貴氏による『女川飯田口説』についての一考察であった。阿部氏は一七五二年に現在の宮城県桃生郡で起こった事件が、一八四二年以降「口説」としてどのように虚構化されていったのか、諸本を比較しながら検討した。事件は四月七日に起こっているのに、口説では八月十五夜と変わっていることに注目し、事件後に関係者宅が焼失したこと、宝暦の大飢饉で多数の死者が出たことに触れ、口説が成立する背景に、処刑者の祟りを恐れ、供養する意識があったのではないかと結論づけた。また盆踊りが禁止されていた伊達藩では盆踊りの代替に「口説」が作られたのではないかと推測した。会場からは諸本が海辺の地域に残っていることの意味、諸本の成立時期のばらつき、盆踊りの禁令の実際などについての質問が出て発表者からの回答があった。

次の発表は飯倉義之氏の「ケサランパサラン、あるいはテンサラバサラー知識が規定する妖怪現象」であった。飯倉氏は、「知識」が現象を「発見」してゆく動きについて、民俗学を含めたメディア史の中で検証した。一九五〇年代に『民間伝承』誌上で応酬された「テンサラバサラー」問答が七〇年代後半にメディアで取り上げられて「ケサランパサラン」としてブームになり、八〇年代以降サブカルチャーの「知識」として定着、九〇年代後半以降、インターネットのコミュニティで共有されていくという、「知識」の受容、流通の経過を示し、あわせて、その「正体」とされるものが「増殖」してゆく過程を示した。「妖怪」研究にとどまらず、「知識と発話」「民俗学的知識の受容と流通」「サブカルチャーと民俗学」といった視点からも示唆に富む発表であった。会場からは七〇年代における「民俗学」の引用のされ方の問題や、その時期にブームが起こる背景についての質問があり、発表者からの回答があった。(青森県)

入江 英弥

第二会場・第三番目は、野村典彦氏の「旅の想像力としての伝説―蒐集のよろこびを手がかりに一」と題する発表であった。氏の論点は、第一に伝説の扱い方について、第二に伝説研究のあり方についてで、柳田国男は伝説をコトとして扱おう

としたが、モノとして扱うことができるのではないかと主張された。具体的には、伝承地以外の方が旅の際に「伝説集」を購入して、それにスタンプ類を押して旅の記念品にした事例を上げて、伝説がモノとして扱われる例証とされた。また、柳田は伝説研究を確立するために、旅の楽しみと研究を切り離そうとした。だが、伝説研究において大切なのは、この旅の楽しみではなかったかと説かれた。JRの駅に行くと、義経伝説紀行といったパンフレットが置いてあり、筆者もそれに従って京都の義経誕生井や弁慶の腰掛石を探訪して回った。伝説がモノとして消費されている現実と向き合わねばならないと感じた。

第四番目は、斉藤純氏の「柳田国男と高見山の伝説―旅行と高木敏雄の影響―」と題する発表だった。氏の論点は、第一に柳田国男の伝説の記述方法について、第二に柳田における高木敏雄からの影響についてであった。まず、柳田が聞き書きした奈良県の高見山の伝説を取り上げて、採訪直後に報告したものと、その後で報告したものとに記述の相違がみられるのは、柳田は類型に対して信頼していて、あとから話の比較を行って補正したことによると結論づけた。次に、柳田の「山の争い」伝説に関する解釈には、高木の『日本伝説集』にみられる発想の影響があると指摘された。筆者は、柳田の伝説研究を考えるために、高木の影響がどの程度のもだったか知りたく念じて来た。周知のように雑誌「郷土研究」の編集方針をめぐって二人は対立したわけだが、そうした人間関係は云々せず、学問上の影響関係を具体的に探る必要性を感じた次第である。(東京都)

## 《第3会場》

三浦俊介

伊藤龍平の「台湾のデパートの怪談―(世間)の位相・(話)の位相―」は、台南市民の間に広がっている「鬼(霊魂・幽霊の意味)」の噂について、南台科技大学の大学生135人へのアンケート結果を踏まえ、世間話が発生する地域的時代的背景を丹念に調査したものである。台湾の噂では、台南市に2002年にオープンした日系某デパートの

エレベーターやトイレ、最上階にあるシネコン、隣接するホテルや学校などに「鬼」が出るという。デパート横の広場にはかつて監獄・処刑場があり、多くの思想犯が収監・公開処刑された。台湾のほとんどの者がそのことを知っていることが話の形成・伝承に深く関わっている。発表は台湾の歴史・地理にも触れ、現地調査の行き届いたものであった。

阿部敏夫の「中国(大連)・大学生の「民間文学」受容について」は、中国大連の大学生が祖父母・父母から伝え聞いている「民間文学」の実態についての調査報告である。大連外国語学院の大学生435名へのアンケートの結果、「孟姜女」「牛郎と織姫」「梁山伯と祝英台」「白蛇伝」だけでなく、「狼少年」「愚公の山移し」などが口頭伝承されていることが判明した。話柄が漢民族四大伝説のほか、グリム童話やイソップ寓話をもととする話にまで及ぶ点が注目される。しかし、より重要なことは、それらルーツを異にする話の多くが夫婦愛や親孝行の美德、誠実、信念の重要性などの多種多様な教訓とともに語られていることである。同地では「民間文学」の中に教訓をこめたり、教訓を読みとったりする傾向が強い。

于曉飛の「ホジェン族イマカン「カンタ・モルゲン」の復元」は、中国最小少数民族ホジェン族の口承文芸についての貴重な研究である。ホジェン族(2000年調査で4640人)はホジェン語を話す、無文字の民族であり、「イマカン(叙事詩)」「タルング(伝説)」「ショフリ(物語)」などの口承文芸がある。今回の発表は、尤金良氏(1932~2003)が1999年末に語り謡ったイマカン「カンタ・モルゲン」と、1930年代に凌純声が採集した「葛門主格格(ガメンジュ姫)」とを比較したものである。詳細な比較検討の結果、イマカン「カンタ・モルゲン」は純粋な口承文芸ではなく、漢語の書物に掲載されていた梗概をもとに脚色され、民謡の調べに乗せて復元された演芸だということが判明した。今後のさらなる総合的な研究が待たれる。

(京都府)

## シンポジウム

伊藤龍平

今回のシンポジウムのテーマは「怪異・妖怪の世界」。昨今、巷で話題になっているテーマであり、それがゆえの難しさもあった。

私はシンポジウムとは「問い」を見つける場であると捉えている。閉会后、何がしかの「問い」を得られたのであれば、その人にとってシンポジウムは成功であったといえよう。

けれども、一方では、その「問い」は学会(あるいは学界)で共有できる「問い」でもなければならぬ。そう考えたとき、今次のシンポジウムは成功であったのか、否か。

まずは、各パネラーの発表題目を紹介する。

西山克「怪異を記録する—ということ」

香川雅信「化物からポケモンへ—キャラクターとしての妖怪—」

田畑千秋「豚妖怪の伝承と伝播」

なお、ポスター等で西山氏の題目が「妖怪を…」となっていたのは誤りとのこと。

西山氏は文献主義の立場から王権と怪異の関係を、香川氏は近世の妖怪がキャラクターであったことを当世の博物学に関連づけて、田畑氏は奄美の妖怪にまつわる口承説話を同地の民俗に関わらせて、それぞれ報告した。

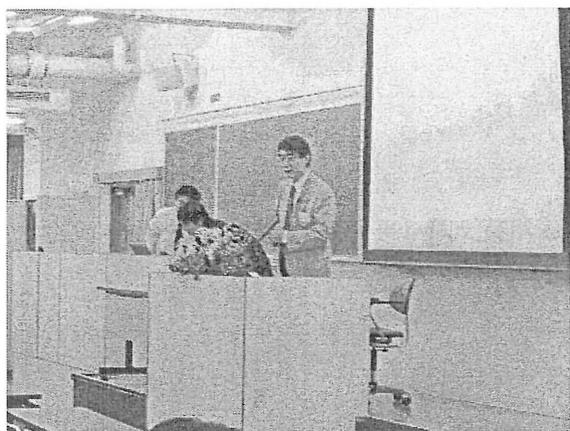
各人の得意領域に引きつけての報告は聴きごたえのあるものであったが、では、その後の討論はどうであったのか。

忌憚のない意見を述べると、パネリスト間の立場の相違が、一向に止揚することなく、時には、相殺していると思われる場面すらあった。短時間の討論の場合、似通ったスタンスの研究者を揃えたほうがよいのではないか。討論の方向性も不鮮明であった。(と、私には感じた)ため、フロアの反応もいまひとつで、単発的な質疑応答のみ目立った。

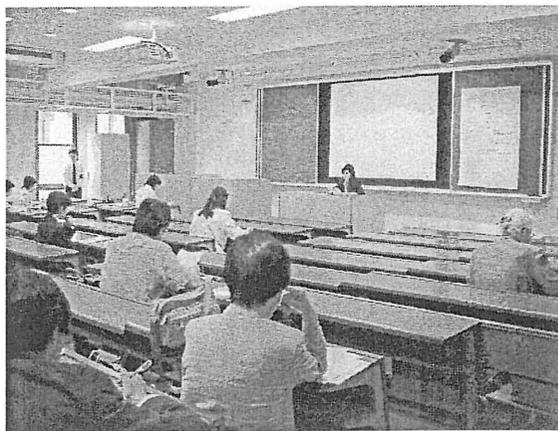
とくに気がかりであったのは、この学会で組上にのせる以上、必要不可欠な「口承」への視線の希薄さである。この点に関しては、フロアから根岸英之氏が発言し、共感した。

以上、辛口の報告になってしまったが、何か参考になるところがあれば幸いである。

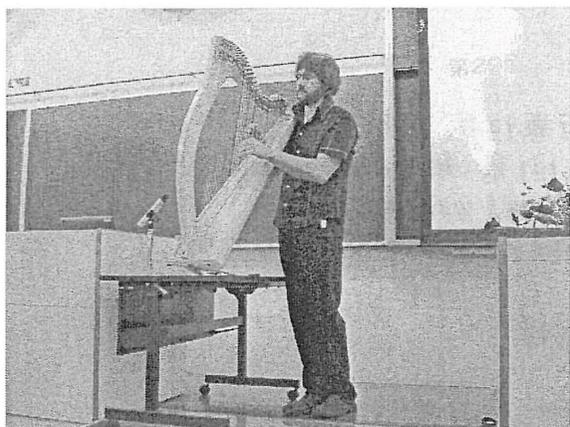
(台湾・台南県)



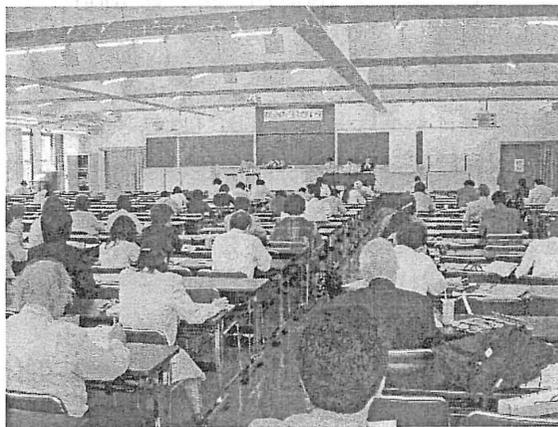
公開講演



研究発表



N・ヘネシー氏による特別演奏



シンポジウム



懇親会スタート



パネラーの方々

事務局より

※住所変更などがありましたら、事務局までご連絡ください。

※口承文芸に関心のある方を是非ご紹介ください。

日本口承文芸学会への入会を希望される方は、入会申込書を事務局までご請求ください。入会金 1000 円、年会費 4000 円です。

《寄贈図書／会報》

神奈川大学日本常民文化研究所「民具マンスリー」第 37 巻 12 号、第 38 巻 1～3 号  
国立歴史民俗博物館『国立歴史民俗博物館研究報告』第 121 集～第 124 集 2005 年 3 月

『国立歴史民俗博物館年報 1 2004 年度』2005 年 6 月

奈良県立民俗博物館『奈良県立民俗博物館研究紀要 第 21 号』2005 年 3 月

北海道立アイヌ民族文化研究センター

『アイヌ民族文化研究センターだより NO. 22』

『ボン カンピソシ 10 総集編』(CD)

『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 第 11 号』

『ピリカ会関係資料の調査研究 アイヌ民族文化研究センター調査研究報告書 1』

新潟県立歴史博物館『新潟県立歴史博物館研究紀要 第 6 号』2005 年 3 月

日本民話の会『日本民話の会通信 No. 180』2005 年 7 月

日本民俗学会『日本民俗学 243』2005 年 8 月

柳田國男記念伊那民俗学研究所『伊那民俗 第 62 号』2005 年 9 月

神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議

『非文字資料研究 NO. 8』2005 年 6 月

一柳廣孝編著『「学校の怪談」はささやく』青弓社、2005 年

《ご案内》

事務局が平成 17 年より下記に変更になりました。

〒263-8522 千葉県稲毛区弥生町 1-3-3

千葉大学文学部 荻原眞子研究室内

Tel/Fax: 043-290-2310

e-mail: shinko@bun.L.chiba-u.ac.jp